

はじめに

「気候景観」(矢沢, 1953)が出版されてから、すでに45年以上の歳月が経った。筆者達はこの本の影響を受けまたは触発されて、気候景観研究に携わったり、常にこのことに関心を抱いてきた。また、この間多くの興味深い気候景観に関連した研究が発表されている。しかし、地理学の中ですら気候景観の有効性や面白さが、多くの人に知られているとは言い難い。これは今までの研究の蓄積が、必ずしも気候景観論として体系化されていないところに本質的な原因があるかもしれないが、本来視覚的な気候景観が視覚的なものとして紹介されてこなかったところにも大きな原因があると思われる。本書では、気候景観のおもしろさを知っていただくため、できるだけ多くの写真や図を使って、視覚的に気候景観の典型的な事例を紹介しようとしたものである。

気候景観研究でしばしば取り上げられるのが偏形樹と屋敷林である。樹冠の片方の枝を欠いて非対称な形をした針葉樹や、樹冠全体がなびくような形をした広葉樹を偏形樹という。これらは、本来対称的になるはずの生育形が風の影響を受け偏形したものである。また、農家などの周囲に植えられている屋敷林(森)や耕地の防風林が、家屋や畑に対して一定方向に仕立てられ、平野や盆地のなかにながりの広がりをもって分布していることがある。これは、家屋や畑地が強い風にさらされるのを防ぐために防風を目的に作られたものである。このように、植物や人間が気候の影響を受け、それに対する反応が植物や人工物の外観に明瞭に現れているとき、その外観などが気候景観と呼ばれている。

気候景観が、気候を中心とした環境と人間や植物などとの間の相互作用によって成立したものとすると、その形態的な特徴を二つの観点から読み解く事ができる。一つは、気候要素の指標として、他の一つは環境評価の指標としてである。前者の観点からは、例えば偏形樹の偏形方向から風向が、偏形の程度から風速が推定でき、ちょうど風向風速計の代役として用いることができる。一方、後者の観点からは、例えば屋敷林を分析することにより、そこに住む人々にとって風が重要で意味のある環境であることを知ることができる。

本書では、日本における山地の偏形樹と、平野の屋敷林や偏形樹など、風にかかわる気候景観を取り上げている。これらについてある時は気候要素の指標として、ある時は気候環境の目安として、描きだしていきたいと思う。

増補版へのあとがき

「日本の気候景観」を2000年1月に出版し、第2版も出してすでに9年が経過した。この間、予想以上の人々に関心を持っていただき、有益な批判や問題点を御指摘していただいた。紙面を借りて御礼申し上げたい。

本書は、副題「風と樹 風と集落」にあるように、風を中心に据えた日本の気候景観を紹介したものである。特に樹木や集落・付属施設などの形態の特徴に見られる気候景観を対象としている。先に述べたご指摘を糧に、さらに内容を充実させ発展させることも考えているが、今回の増補版を出版するに当たって、表記の編者4名の話し合いによって下記のような事例を新たに紹介させていただくことにとどめた。

風雪流線や着雪など、気候現象の痕跡としての気候景観については本書「1.2 気候景観の事例」で示しながら旧版では触れなかった。この事例を以下のように示した。

1. 小川 肇：雪面形によって冬山の風の分布を知る－北アルプス中部の山を例に
2. 青山高義：地形と風が作る平野の気候景観－津軽平野の電柱着雪とリンゴ栽培

本書の表題にあるように旧版では日本に限ったが、将来の方向の一つとして「世界の気候景観」を取り上げることも考えられる。このような方向に沿った二つの事例を以下のように紹介した。

3. 岡 秀一：風に向かって立つ－アタカマ砂漠のティランジア群落－
4. 梅本 亨：北極圏の森林限界－スカンジナビア半島北部－